木畑道夫が作成した「津田永忠遺績之碑」建設募金の趣意書の末尾部分

（現代語訳）

津田永忠が没してほとんど二百年になる。
田はますます肥沃にして、作物の稔りはますます豊穣である。
民戸は年を追って増し加わり、家から鼓腹撃壌の声がする。
彼が築いた学校もまた、広大かつ偉大なさまで今日まで存在し、
学ぶ者たちの音声が耳から絶えることがない。
これが池田侯と津田永忠の事績の余沢でなければ、よくここに至るだろうか。
熊沢蕃山は、伝記も行状事績考なども、すでに先学の著書があって世に広まっており、
蕃山村の遺趾に立派な碑が設けられて、その功徳を顕彰している。
しかし津田永忠には、その人柄や事歴を記述した一冊の書物もなく、
その功績を讃える一つの碑もない。
ひどく記録に欠けているので、私が年譜を作成し、その概要を広めたのである。
なおかつ、功を記す碑を適当な場所に設けて、その事歴と功績を讃え、これを不朽のものとし、
郷土の人々が津田永忠の大事業とその跡を追憶して、忘れないようにしたいのである。
しかしながら、その造作からして巨額の資金が必要になるので、
私のような貧しい一学者がよく支弁できるものではない。
そのため、遷延すること数年にわたり、
私はすでに頽齢を加え、体は弱って病多く、朝夕を計りがたい状態である。
歳月は走り行き、心は遠ざかって、ついに宿志を遂げられなくなるのを恐れている。
諸君、私の微意をくみ取って、幸いにも援助の力を賜れれば、
私は後進への責務を償うことができるので、幾度も請う。諸君、これを諒察せよと。

（読み下し）

津田翁没して殆ど二百年　田は益々肥沃にして　禾稼は益々豊穣
民戸年を逐って蕃殖し　家に鼓腹撃壌の声あり
夫の学校の如きも亦　輪奐巍然として今日に存在し　?唔の音声耳に絶たず
是　先公の翁との余沢に非ずんば　何ぞ能く茲に至らんや
熊沢子、伝、行状事績考等、既に先輩の著あって世に行はれ
蕃山村の遺趾亦豊碑を設けて其功徳を表章せり
翁には一書の其性行事歴を記するなく　一碑の其功徳を勒するなく
頗る闕典に属するを以て　僕曩に年譜を作り其概を表出せり
猶且紀功の碑を恰好の地に設け　其事歴功徳を勒し　之を不朽に垂れ
備人をして翁の鴻業遺績を追憶して　失はざらしめんと欲す
而して其構造頗る巨額の金員を要するを以て　余輩一寒書生の能弁すべきに非ず
故を以て遷延茲に数年　僕既に頽齢加ふるに弱肩多病朝夕を計らず
年時と馳せ　心歳と去て　竟に宿志の遂る能はざらん事を恐る
諸君　僕が微意を酌量ありて幸に援助の力を賜はば
余輩後進の責或は償ふべきに　庶幾し請う　諸君これを諒察せよ